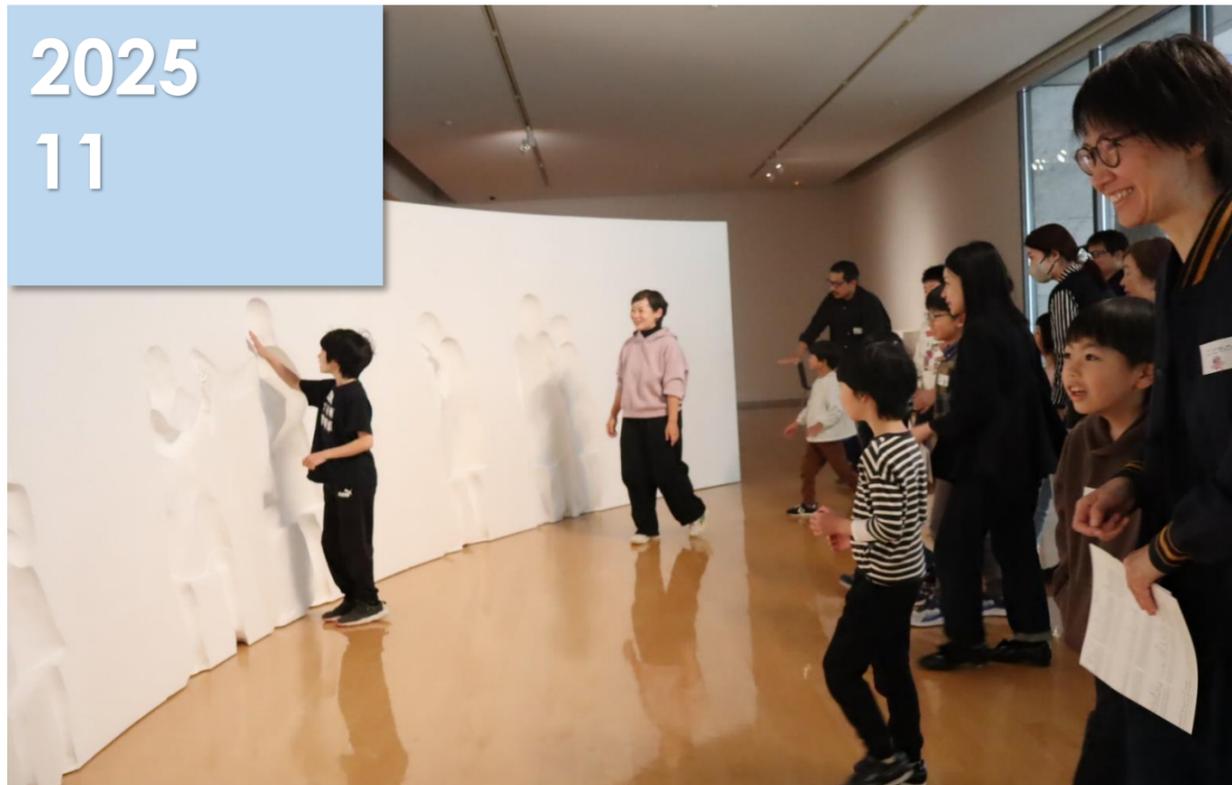


2025  
11



小企画 美術の中のかたち—手で見る造形「中谷ミチコ 影、魚をねかしつける」関連  
こどものイベント

## 「アナボコのかたちに出会おう！」

■開催日時：2025年11月8日(土) 10:15~12:45

■講師：中谷ミチコ（なかに・みちこ）

■参加者：こども12名、保護者15名

■対象：小学生~中学生

■場所：常設展示室、アトリエ2

■概要

出品作家の中谷ミチコさんを講師に迎え、作品に触れながらかたち展を鑑賞した後、粘土と石膏をつかって立体作品づくりに挑戦しました。

### ■オリエンテーションと展覧会鑑賞

プログラムのはじめ、かたち展を担当した遊免学芸員と出品作家の中谷ミチコさんが登場！中谷さんは凹凸が反転している立体作品を制作をされている彫刻家で、現在当館では中谷さんの作品に触れることができる展示を開催中です。早速、実際に体感するため、みんなで展示室へ。そこには大きな石膏作品が展示されており、その中にはこどもたちの背丈とほぼ同じくらいの女の子の像がいくつもありました。中谷さんが「まずは作品にさわってみてね、その後は遠くから見てください」と案内されると、こどもたちは作品に触れながら、その手ざわりを楽しみ、じっくりと鑑賞していました。



作品にふれながら鑑賞

### ◇参加者の感想（※原文をそのまま紹介）

・石こうがかたまるまで、どんなかたちになるか考えてワクワクした。むずかしかったけど、楽しいし、うれしかった。（小6）

・「かげ、魚をねかしつける」の作品でかげがあって、とびでているように見えて、おもしろかったです。（小4）

・自宅で石膏などを扱うことは難しいので、実際に体験できてよかったです。また、作品の見方も変わるなと感じました。（保護者）

・中谷先生と一緒に作品を鑑賞して、作品を作るのがとても良い経験でした。スタッフの方も親切に教えていただきました。（保護者）

### ■制作①

鑑賞後はアトリエに移動して、制作の時間です。今回こどもたちが使った材料は、中谷さんが普段の作品づくりで使っている"粘土と石膏"。中谷さんが「まずは粘土に穴をあけて、アリのおうちをつくりましょう！」と声をかけると、最初は緊張していたこどもたちも、粘土にふれるうちに表情がやわらぎ、手や粘土へらを使いながら夢中になって穴をあけていきました。大胆に大きな穴をあける子、慎重に丁寧に穴をつなげていく子など、取り組み方はさまざまで、それぞれの個性が表れた"アリのおうち"が完成しました！



アリのおうちをつくる様子

### ■制作②（アナボコのかたち）

アリのおうちが完成すると、次はその穴に石膏を流し入れます。石膏は次第に温かくなり、やがて固まっています。穴の中はどんなかたちになっているのだろうか？こどもたちは時折石膏に触れながら、硬化するまでの時間を過ごしました。

石膏が固まったら最後の仕上げ！周りの粘土を外していきます。中谷さんが"この過程が一番の醍醐味"とおっしゃった、この作業は楽しくもあり、少し大変なところもありましたが、丁寧に取り除くと、石膏でできた"アナボコのかたち"が少しずつ顔を出し始めました。「穴のなかはこんなかたちだったんだ！」トゲトゲと尖ったかたち、丸みを帯びたかたち、いろいろなかたちが現れました。



中谷さんと一緒に制作

### ■ふりかえり

活動の最後に感想を聞くと、小学一年生の参加者が「前に中谷ミチコさんをテレビで見ても、今日は作品を見るのをとても楽しみにしていました。一緒に作品が作れてよかった」と話し、まわりの参加者も笑顔になりました。ほかにも「穴のかたちが思ったのと違っておもしろかった」「難しいことが楽しかった」との声があがり、中谷さんも嬉しそうに耳を傾けておられました。年に一度だけ、作品に触れることができる"かたち展"。そんな特別な展示を中谷さんとともに楽しみ、石膏をつかった制作まで行えた贅沢な一日になりました。（小田美沙紀/エドゥケーター）



丁寧に粘土を取り除き、もうすぐ完成！

### □講師からのコメント

意図していた形を裏切って出てきた石膏のかけらに悔し涙を流したお子さんもいらっしゃいました。その涙も素敵だな、と思いながら「大丈夫、大丈夫。よく見るとこれは蝶々の様だ！」と声掛けさせていただきました。これから何が起るのかなかなか想像ができない中、子どもたちは素直に自分の手によって刻々と変化する形を楽しんでくれている様でした。子どもたちから沢山の発見の声が聞こえた事も印象に残っています。見たこともない不思議な形が生まれて、私たちの世界には、まだ形作られていない新しい「造形」がある事に気付かされる、素晴らしい時間でした。ご参加いただいた皆さん、本当に有難うございました。

（彫刻家 中谷ミチコ氏）

### □担当学芸員からのコメント

粘土のかたまりをいろいろな方向から掘っていき、最終的にその穴がかたちとして残るという発想が面白く、中谷さんが驚くほどの面白いかたちが続出していました。今回の参加者には低学年の子が多く、粘土を掻き出す作業などはとても根気のいる作業でしたので、少し心配もしたのですが、みなさんびっくりするくらい頑張られていて、その姿にも感動しました。作品の制作過程に触れる今回のようなイベントはぜひ継続して開催していきたいです。（遊免学芸員）